

Significance and Method of Teaching "the Observation Method" in the Kindergarten Teacher Training Course: Experimenting with the Utilization of TV Documentaries

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): child understanding, teacher training, observation method, the facts of learning, TV documentaries 作成者: OSUGI , Minoru メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4264

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



幼稚園教員養成課程における「観察法」の指導意義と方法

—TVドキュメンタリー活用の試み—

児童学部 児童学科 大 杉 稔

要旨

観察法は、子ども理解の方法として幼稚園等の現場で最も広く実践され、また最も大切なものである。そのため、大学等の幼稚園教員養成課程においても、この手法は重点的に扱われている。

しかしながら、大学の中で観察法を指導するには幾つかの困難がある。まず、園に出向いて直接観察できればよいが、担当クラスの学生数が多い場合は難しいこと。また、子どもによほど近づかないとその声や表情を捉えられず「学びの事実」と向き合うことができないこと。加えて子ども理解においては、同じ子どもを長期的・継続的に観察したり人間関係の中で捉えたりすることが大切だが、単発的な観察ではそれが難しいことなどである。

一方、TVドキュメンタリーとして編集された幼児の学びは分かり易く、かつ興味深い事実を切り取っているところが魅力である。制作上の意図が大学教育の目的と合致していれば、積極的に活用すべきである。

本研究は、TVドキュメンタリーの映像資料を効果的に活用することにより学生が観察法の基本を身につけることができることを実践的に証明したものである。

キーワード：子ども理解、教員養成、観察法、学びの事実、TVドキュメンタリー

はじめに

幼児と向き合う専門職の一つが幼稚園教諭である。彼らは日々、子どもたちがより良く育ち、より良く学ぶための環境づくりに努めている。

教員の設定した環境が、子どもの自発的な活動の刺激になることは多い。そして、子どもが環境に働きかけているその先に、個々の学びの対象がある。

例えば、砂場で好んで遊ぶ子どもたちのある瞬間の「心地よさ」1つを捉えても、砂のさらさらとした感触であったり、穴を深く掘る喜びであったりと、そこに集う子ども個々に違うということである。

その様子を見ながら、どの子にどう声をかけようか、また明日は、その場に何を用意しようかと考える。それが、幼稚園教諭の専門性であろう。

子どものための環境を整えるには、当然のことながら発達にかかる知識も必要だ。しかし、それ以上に大切なのは、目の前の子どもが、今、何に心を動かされているのかが分かるということではないだろうか。

本稿では、幼稚園教員養成の場で、そうした「学びの事実」を通した子ども理解の重要性についてどう気付かせ、また、その技術をどのように獲得できればよいかについて考究する。大学における筆者自

身の授業実践の効果について取り上げつつ、その整理を試みる。

1. 「子どもが好きである」という資質・能力

幼稚園教諭に求められる資質・能力について、現場の教員はどのように捉えているのだろうか。これについて質問紙調査を行った2つの研究結果に触れる。

寅丸、西川、濱田ら(2010)は、尼崎市内3園の幼稚園教師86名に対して2009年に調査¹を行った。その結果、資質・能力として想定された34項目中、強い肯定（ぜひとも必要）の比率が最も高かったのは「子どもが好きである（89.7%）」であったという。

藤尾、古川、浅川(2010)は、同類の調査²を兵庫県内の公立幼稚園教員96名について実施している。こちらは、10名の教員に対する質問法による予備調査で得られた内容に、先行研究で整理されている項目も参考にして、教員の資質・能力にかかる項目を39にまとめている。そして、この調査においても、「重要順位」が最も高かったのは「子どもが好きである」の項目であった。

ほぼ同時期の、また同様に兵庫県内の調査であったとは言え、これらは独自の研究であって、検証し

ようとした資質・能力の項目が異なることはもちろん、集計を含む調査の手法にも違いがある。それでも第1位の結果が同じであることには注目せざるを得ない。

さて、文部科学省のホームページにも掲載されている保育教諭養成課程研究会（2017）作成の図「幼稚園教諭・保育教諭としての成長過程」³では、以下のような幼稚園教諭等の成長過程を構想している。（図1は、筆者が簡単にしたもの）

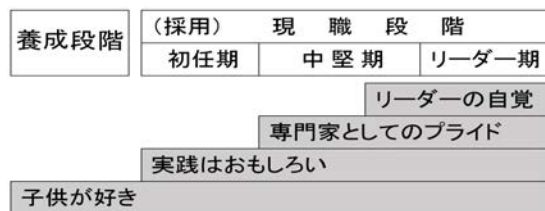


図1 幼稚園教諭・保育教諭としての成長過程

この図によれば、「子どもが好きである」ことは、養成段階（大学・短期大学・専門学校等）から求められている。さらにそれは、採用後もずっと続く幼稚園教諭のベースとなる資質・能力であることを示している。

このように、現場で当然のように期待され、かつ国からも求められている「子どもが好きである」という資質・能力について、筆者には疑念がある。以下、資質と能力に分けて検討することとし、まずは資質として考えてみたい。

「子どもが好き」とは、程度の問題もあるだろうが、これを持って幼児教育を任せるにふさわしい資質とするのは雑駁に過ぎる。幼児教育の専門家としての資質だと言うからには、子どもの何がどのように好きなのか整理されなければならない。

子どもの笑顔が好きだ、甘えてくれるのが嬉しいというのは資質ではない。自分を慕ってくる者を可愛いと感じるのは当然のことだからである。子どもの拗ねた表情も好きだ、悪態をつくのも許せるといった耐性、寛容さについても資質として不十分である。教員の中で消化できたとしても、それが一人一人の子どもの育ちに生きなければ意味がないのである。

一方、幼稚園教諭に求められる能力は、『幼稚園教育要領』総則に記されているとおり、「幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成」⁴する力として集約できる。よって、そこから導かれる基本的な資質は、「子どもの表情や行動に関心があり、その

意味を考えるのが好き」なことだと想定できよう。資質としての「子どもが好き」は、そう認識されなければならない。

また、図1において、「子どもが好き」には、就職後「実践はおもしろい」が付加されているが、同様にこれも「表情や行動から子どもの思いや願いを理解して、その小さな願いを実現させるために、幼稚園教諭として何ができるかを考え、工夫することがおもしろい」という意味でなければならない。

単に、付加され積み上がっていくというのは構造として脆い。幼稚園教諭としての資質が本物であれば、自然にその質が転化し、より高次のものに発展していくはずである。これまでの考えを基に、図1の言葉を書き換えると、図2のようになる。

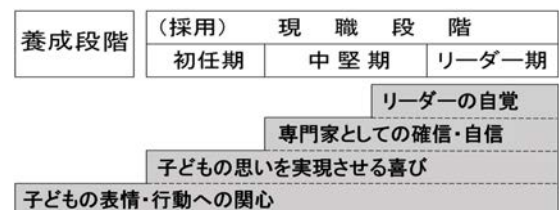


図2 幼稚園教諭・保育教諭としての成長過程（代案）

大学等の幼稚園教諭養成課程で扱う指導内容には、例えば発達にかかる知識や、ピアノの弾き歌い、絵本の読み聞かせ等の様々なスキルがある。しかし、それだけでは、子どもの主体的な活動の実現は難しい。表情や行動として表れた「学びの事実」から、その子どもの思いを読み取ること、背景を考えると、そのための手法を学ぶことが必要であろう。図2は、その大切さを明確にするために、筆者が手を加えたものである。

2. 入門としての観察法と本研究の目的

大学等の養成課程において、子ども理解のための「観察法」について学び、（模擬的に）実践する意義は、正にそこにある。

観察法は、一般に次のように分類される（表1）。

表1 観察法の分類

		観察場面による分類	
		自然(的)観察法	実験(的)観察法
観察形態による分類	参与(参加)観察法		
	非参与(参加)観察法	◎	

観察法はこのほか、サンプリングで分けた場合、「時間見本法」、「場面選択法（見本法）」等に分類され、また記録の仕方では、「行動描写法」、「エピソード記述（記録）（法）」等に分類される。

それらの方法についての概説は行うものとして、養成段階において最初に体験させるべきなのは、どの観察法であろうか。

まず、観察場面で分けた場合は「自然観察法」であり、形態では「非参与観察法」になるだろう（表1中の◎）。子どものありのままの姿を第三者の目で捉えることが観察の基本だからである。また、自然観察法では、子どもの発達がよく理解でき、非参与型で行うことで観ることはもちろん記録にも集中できるからである。

また、サンプリングによる分類で掲げた「時間見本法」と「場面選択法」は、時間を区切るという点では同じである。しかし、その場の人間関係を含んだ行為や活動を場面のまとまりとして切り取った方が、分析（意味づけ）がしやすいであろう。

記録の仕方では、学生によっては、エピソード的な記述になってしまう者もいるだろう。しかし、その方法ではすべての事実を観ながら書き取ることは不可能である。後にエピソードとして仕上げるために、忘れがちな「会話」を含め、メモとして多くの事実を記録するという形を体験させたい。

したがって、養成期に学ぶべき観察法は、自然に遊ぶ一区切りの場面における子どもの言動等を、客観的に観て記録するというものになる。

本研究の目的は、幼児園教諭を養成する大学において、TVドキュメンタリーを映像資料として活用する観察法の指導にはどのような効果があるかを、実践事例を通して明らかにすることである。具体的には、受講した学生の反応や記述、また、指導後の質問紙に対する回答傾向の考察を通じて、その効果について検討を行う。

TVドキュメンタリーは録画であるから、何度でも繰り返して観ることができる。それにより、視点を変えて見直すことが可能になる。本稿にまとめたものは、この録画の特性が生きる授業が構成できるかどうかの検証でもある。

なお、実践の内容については第4節で詳述する。それに先立ち、続く第3節では、実際に授業で使った海外制作のTVドキュメンタリーの特性について整理する。

3. 海外制作のTVドキュメンタリー活用の利点

使用したTVドキュメンタリーは、「4歳児のヒミツー驚きがいっぱい」⁵である。

全45分から成る本番組は、イギリスの放送局が制作したもので、NHKが放送したのは、その日本語吹き替え版である。顔見知りではない4歳の子どもたちが12人、ある保育園に集められ、そこで1日を過ごす。その後、半年経って再び保育園に集められ、また1日を過ごす。その様子を記録している。

幼稚園教諭養成に関わって、視聴が有効と思われる本番組の特性は、次の6点に集約できる。

- ① 12人の子どもたちは、男女同数（6人ずつ）、また能力面、性格面からバランスよく選ばれており、自由保育を基本とする現実の園生活の縮図となっていること。
- ② 人間関係調整力が大きく育つ「4歳」を取り上げ、さらに、最初の出会い・活動から半年のブランクを空けて再集合させ、その後の活動の様子を見せていることで、個々の子ども、また集団としての成長が分かり易いこと。
- ③ 保育経験が豊富な2人の保育者が子どもたちの自然な活動を支えるほか、2人の研究者⁶が専用のブースからその様子を観察しつつ、タイムリーな解説を加えている。これにより、子どもを観察する視点について学んだり、4歳の平均的な発達段階や個別の発達特性について理解できること。
- ④ 番組中、保育者が子どもたちを集め、「分け合って何？」「分け合おうとしない人には何て言う？」などと質問する場面がある。個人を対象とする面接法とは厳密には異なるが、これにより、子どもに直接尋ねてみるという子ども理解の手法について学ぶことができること。
- ⑤ 12人の子どもの中で、特に個性が際立つ6名（男女各3）については、家庭生活の様子も動画で見せている。また、両親から見た我が子の特性や成長にかかる願い等も紹介している。これらにより、多面的な子ども理解が可能になること。
- ⑥ 番組後半では、実験的観察法を取り入れている。半年後集まった10人を「活発」な子ども、「おとなしい」子どもの2グループ（男子3人、女子2人の5人ずつ）に分け、同じ材料を使って、同時に「隠れ家づくり」をさせたとき、どちらがよ良く協力できるかについて調べている。これにより（心理学の研究方法としては）純粋な観察法（自然的

観察法)のほかに、実験的な方法も用いることができることを学ぶことができる。

一方、このドキュメンタリーにも問題がないわけではない。意図を持って編集され、切り取られた情報であるというTV番組一般の特徴を除けば、その最大のものは、観察対象が外国の子どもであるということと、吹き替えているため生の言葉ではないことであろう。

しかしながら、日本人の場合、外国の子どもほどの明確な個性が表れにくいことと、一般の園で自然な状態で録画したものは、音声聞き取りにくい場合が多いことなどの事情を考えると、初級者が子ども理解の仕方や観察法のポイントをつかむには、十分な教材であると言えるであろう。

またイギリスの子どもは、日本人に比べて一般に表情の変化が明確であり、しぐさも大きい。幼児の観察法では、言葉よりも広いノンバーバルなコミュニケーションを読むことを大切にしており、そうした点からも、外国の子どもであることは、感情を読み取る初歩的な練習材として、むしろプラスに働くと考えられる。

4. 「観察法」指導の実際

勤務校では、『児童研究法』と名付けられた授業において、観察法について学ぶ機会がある。これは、幼稚園教諭教員免許取得にかかる必修教科となっている。同授業は児童学科の3年生を中心として160名が受講しており、2分して80名ずつのクラスサイズとなっている。

本節に示す筆者の実践は、2017年春期に行ったものである。以下、観察法を含む児童研究の全体を概観することを目的とした第1回と、TVドキュメンタリーを用いた第2・3回の授業について整理を試みる⁷⁾。

幼児の研究は、児童心理学、発達心理学等と密接な関係を持つことから、時間配分の軽重はあるものの、現場の主たる研究方法である観察法以外の心理学的な研究手法についても、一通り学ぶことになっている。また、観察法の特徴は、他の手法と比べるとによって浮き上がってくるとも考えられる。

【第1回】

筆者は授業の冒頭、『児童研究法』とは様々な調べ方を学び、子ども理解に役立てる授業であることを説明した上で、以下の問いを立てた。

3歳の子どもはどんな遊びが好きか。

そして、その問いの答えを得るには、どのように調べればよいか受講生に考えさせた。

ワークシートの中心にこの問い(研究課題)を置き(図3参照)、その周りに思いつくままに、調べ方(研究方法)を書き込ませた。次頁の2枚は、学生Aの記述の推移を表している。

〔上〕真上から時計回りに、実験的観察法、インタビュー法(対3歳児)、インタビュー法(対家族)、インタビュー法(対大人)、自然的観察法である。

〔下〕グループワークによって検討し合い、その後、全体場で代表者の提案を基にさらに検討を加えるという過程で、Aの気づき書き加えられ、完成したシートである。

Aに限らず、ほとんどの受講生が独力で3つ以上の「調べ方」を考案することができた。その代表的な例は、以下の通りである。

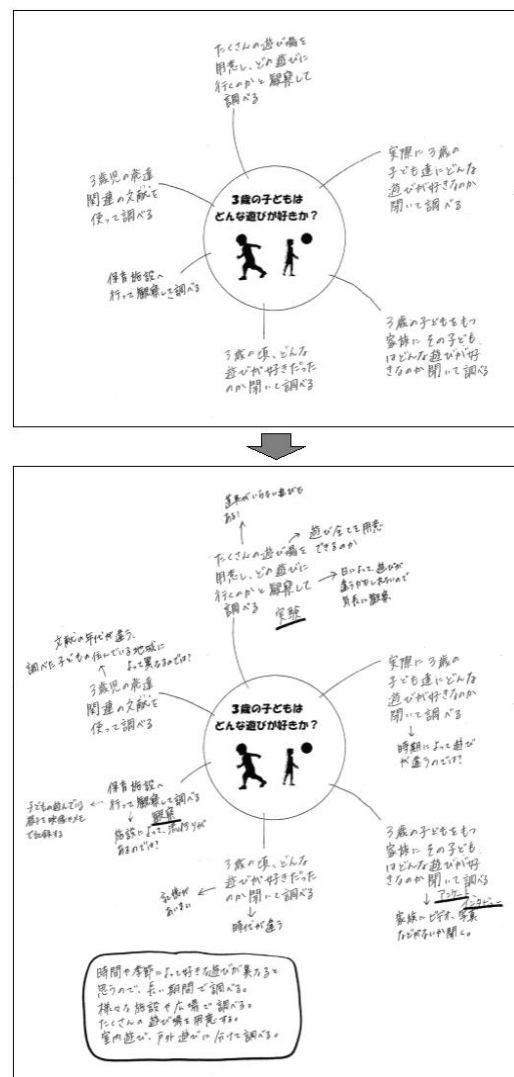


図3 「児童研究法」ワークシート(第1回)

ア 3歳児が遊ぶ様子を見て、記録する。(観察法)
イ 普段どんな遊びをしているか聞く。(面接法)
ウ おもちゃを用意してどれで遊ぶか見る。

(実験法)

エ「好きな遊びアンケート」を行う。(質問紙法)

オ 専門書やインターネットで調べる。

(文献研究法)

() 内に示した正式な「研究法」の名称は、講義の最終に板書で整理して伝えた。

この段階で重要なことは、アイデアのままでは研究と呼ぶには程遠く、細かい条件を吟味しないと、実際には事が進まないと気付かせることであった。

2段階に設けた検討過程では、「いつ、どのぐらいの時間(期間)」「どこで、どのような環境下で」「誰が、誰(人数も)を対象に」「何を明らかにするために」行うのか等の視点から足りない視点を埋めていった。特に後半の全体での吟味過程では、教員が引き出し役となり、代表者との遣り取りを通じて、検討できていない視点・内容を明らかにしていった。

そのうち、観察法にかかる遣り取りの1例を以下に挙げる。

[S]=発表者である代表の学生、S1~3=他の受講生、T=授業者(筆者)である。

[S]は前に出て、大きく映し出されたシートを指さしながら発表する。

[S]: 3歳の子どもが集まっているところに行き、遊んでいる様子を観察するとよいと思います。

T: 集まっているところというのがいいですね。1人だけだとその子ども特有の遊びになってしまい、3歳の一般的な姿とは言えないよね。では、3歳の子どもが集まっているのは、例えばどこ?

[S]: 保育園とか、公園とか。

T: みなさん、この考えはどう? 今の時点で気になることは?

S1: 園だと、どの子が3歳児か分かるけど、公園だと見分けがつかないと思います。

T: なるほど。じゃあ、園に絞ろう。[S]さん、3歳児が積み木で遊んでいるとして、あなたは、どのように観察するつもりですか。

[S]: 近づいてメモを取ります。

T: いいねえ。みなさん、[S]さんのようにメモを取るとしたら、何に注目する?

S2: わたしだったら、積み方を見ます。

T: ということ?

S2: 平らな面をどのように見付けるのか見ます。

T: 3歳だと、積み上げるのにも試行錯誤があるかもしれないということだね。じゃあ、あなたは?

S3: わたしは、何を作っているか、見ます。他の年齢の子どもと比べます。

T: なるほど。保育園だったら、2歳や4歳との違いも発見できそうだね。メモだけでなく、写真や動画でも記録しておくといいかもしれない。

T: とところで、さっきの公園の話だけど、もし、可能だとしたら、園での観察よりも公園の方が良いことはない? [S]さん、どう? —後略—

発表者やその他の受講生の中には、2年次に経験した「保育実習」で見聞きしたことを研究法のヒントにしたり、またその根拠として示す者が何名もいた。

本学では4年次に「幼稚園教育実習」が置かれているが、それら幼児にかかる2つの現場実習の狭間で、言わば理論編であるこの『児童研究法』を学ぶことは大きな意味をもつのである。つまり、「実際の子どもを知る(実践)」→「子どもの見方を学ぶ(理論)」→「子どもを実の場で理解する(実践)」の3層構造は、互いの必要性を高め、学びを強固にする。

この過程では、Aの場合、本稿の中心事例である観察法に関わって、以下の書き込み(付加)が見られた。

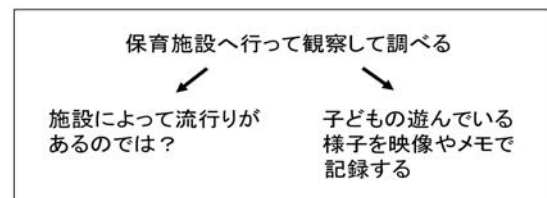


図4 Aの書き込み(観察法)

2本の矢印より下が追加部分である。うち左は、グループワーク(第1次検討)によって、メンバーから指摘を受けて書かれたものである。右は、全体検討の場で、代表者と授業者の遣り取りを聞いて、付け加えたものである。このAに限らず、どの受講生も矢印で引き出すなどしながら多くの書き込みを行い、[上]から[下]へ大きな変容を見せた。

この第1回の受講後の感想には高い満足を示すものが多く見られた。以下に、3名の記述を掲げる。

*個人で方法を考えると、文献や周りの人に聞くと
いうものしか思い浮かばなかったが、グループワー

クでは、実際に園に出かけて観察したり子どもの様子を見るための実験をしたりするという「自分の目で見ると」やり方が多く出されたので良い方法だと思った。

※3 歳児の遊びの調べ方については、他の人の調べ方や意見を比べて考えていくことで、たくさんの方が出てくることが分かった。また、どの調べ方にも欠点があることを踏まえると、インタビューと実験を組み合わせたり、2つの園で結果を比較したりして調べていくと、より3歳児の遊びがはっきりすると思った。(中略) すごく充実した授業だった。

※観察するだけでなく「実験する」という方法があることに気付いて、なるほどと思った。今までは、何となく「こういう発達なんや」と知るだけで終わっていたので、この授業では「なぜ、どうして？」などの疑問を常に持ちながら授業に臨みたい。

【第2回】

この時間にはイギリスの保育園における4歳の子どもたちの様子をTVドキュメンタリーで視聴すること、またこの番組の中には、第1回に出てきた研究法がいくつか登場することについてまず伝え、その後、番組の内容や大まかな構成について説明した。

次いで、番組に主に登場する6人の子どもの顔写真(図5:動画から切り取って筆者が資料化したもの)を見せ、キャラクターの特徴について以下の通りごく簡単に伝えた。



図5 主な子どもの顔写真

目立ちたがりのスカイラ (SKYLA)

気まぐれなキューバ (CUBA)

しっかり者のジェイダ (JADA)

腕白なハイム (CHAIM)

おませなジェシカ (JESSICA)

正義感のあるクリスチャン (CHRISTIAN)

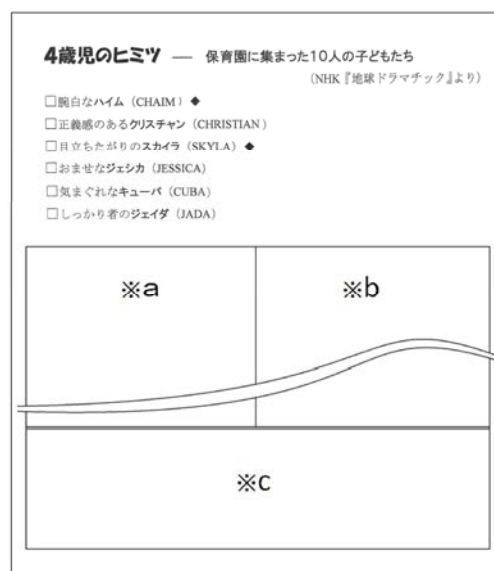


図6 ワークシート(第2回)

その上で、誰か1人を選び、その様子について記録する(図6ワークシート参照)ように指示した。目的は、半年後のその子の成長について考えるためであると伝えた。シート(図6)内、※a欄には、選択した観察対象の子どもの初めの姿(会話・表情・行為等)を、※bには同じ子どもの半年後の姿を、さらに※c欄には、※a、※bの2欄を比較し、成長したと思われる部分を明らかにして書くように求めた。

以下、「腕白な」ハイムと「目立ちたがりの」スカイラを選んだ2人の学生の記述(a、bについては一部)を示す。

[スカイラ]を観察対象とした学生Bの記述

※a「やめてよ」「返してよ」→ハイム

クッキーがなくて泣く(注目をあびたくて泣く)

「いやだ、王様になりたい」(頑固で嫌なものは嫌)

※bチョコを分けるかどうか迷う(葛藤)

「何でウサちゃんをかいなの」

(チョコを奪ったハイムの手紙を素直に受け取る)

※c 自己主張が強いスカイラであったが、半年の間に人の気持ちを思いやる心が増えたと思う。チョコレートを分けるときには、上手く言葉や態度でまだ表すことが出来ない様子だったが、顔いっばいに葛藤が表れているのを見て、考えているんだな、成長したなと思った。周りの女の子たちが、スカイラ(自身)の肩をもってくれていると感じた表情は、ほっとした様子だった。大人になる過程でたくさんの日々と壁をのり越えたスカイラは、主張を上手く活かす人間になると思う。(下線筆者)

「ハイム」を観察対象とした学生Cの記述

※a 乱暴なふるまい→言葉より行動

人の話を聞くことが苦手 独占欲

※b あそびを考え、友達をさそう

交渉できるようになった（ゆずり合う）

あやまることができる（罪悪感がある・衝撃的に）

悪いことをしたと認めている＋つぐないの心

※c ハイムは最初、思い立ったらすぐに行動に移してしまい、また、それを認めることができなかったが、半年後には思っていることを言葉に出すことができるようになっていた。しかし、友達に対して無理な行動をしてしまうことはまだ多い。でもそのような際は、自分でもしてはいけないことをしたということを理解しているため、きちんとあやまることができるようになっていた。これらの変化により、友達とかかわり、遊ぶ機会が以前より増えていた。真反対の性格のクリスチャンと一緒に遊んでいることが意外だと思ったが、よく考えると、ハイムはクリスチャンのようになりたい気持ちがあるのではないかと思った。（下線筆者）

※a・※b 欄において、学生Bは会話や行為等の事実をできる限り忠実に記録しようとしているが、学生Cの場合は、自分の中で意味づけをしてから書き留めている。Bのように書くよう指示をしたにもかかわらず、受講生全体では、Cのタイプの記述が多かった。

観察法では、まずは主観による解釈を抑え、目の前の子どもの姿を注意深く観察し、事実として正確に記録することが求められるが、経験の乏しい養成の段階では、それこそが難しいことである。「学びの事実」と「分析」との2段階で子どもを捉えるというスキルは、その意味の理解だけでなく、事実を出し合って、協同して分析にあたる等、効果の実感を経て身につくものであるだろう。養成のための授業においても、そうした効果の実感できる工夫が求められるところである。

※c 欄では、学生B、Cともに、半年間で何が変化したのかを、まずまとめて記述している。抽象的ではあっても、これがこの欄の「事実」なのであり、他の受講生の記述を見ても、このパターンは多くみられた。

そのあとに続く内容は、受講生によって様々である。学生Bは対象児の表情からも成長が読み取れたこ

とを述べた上で、自分の物を人に分け与えた経験を「大人になる過程」と捉え直し、今後の育ちの予測にまで言及している。これは、切り取った場面を分析するという観察法の本来の目的からは逸脱しているが、人間の成長という大きなものの捉えを、幼児期の一つの転換点で語ろうとしたことに意味があるだろう。また、最後の「主張を上手く活かす人間に」という文言には、半年前、主張の強さがマイナス面として目立っていた対象児だが、今後はそれを長所として生かせるようになってほしいとのBの願いが込められている。このようにして、観察者になる練習は、広く保育者としての資質を育んでいくのである。

一方、学生Cは、中ほどの記述において、半年後の対象児は、友達に対して「無理な行動」をしてしまうという表面部分には大きな変化はないが、内面の変化（してはいけないことをしたという理解）こそが大きいのだと指摘する。さらにCは、この内面の育ちが行動にも変化（友達と関わる、遊ぶ機会が増えた）を与えたと分析する。この行動と内面の育ちの関係は、まさに子ども理解の要となる部分である。

授業は、この後、観察対象児が異なる6人の学生が前に出て、※a・※bに記した子どもの事実（特に大事だと考えられる部分のみ）と、それを基に子どもの半年間の成長をどのように捉えたか（※c）を発表するという活動へと展開した。

筆者は第1回と同様、それらの発表内容につながらながら受講生に課題を投げかけたのだが、先に挙げた学生Cは代表者ではなかったために、その気づきを話題にできなかったことが悔やまれる。例えば、行動の変化と内面の変化はどちらが先に起きるのか、受講生それぞれが観察対象とした子どもを例に挙げて議論できれば、さらに深い学びにつながったと思われる。来年度の授業展開に生かしたい。

【第3回】



このTVドキュメンタリーには、第2回で注目した主たる6人とは別に、映像として把握できる時間が彼らと同等に長いルーク（LUKE）という男児（上）が存在する。彼の言動に対しては研究者の解説も入っておらず、そうしたヒントを得ずに行動観察・分析をするには好適な対象であった。よってこの授業では、第2回の経験を

踏まえ、発展的に以下の課題に取り組ませることにした。

ハイムがチョコレートにケーキに手を出した場面におけるルークの様子に注目し、その言動について解釈する。

観察対象として切り取る場面は以下の部分である。

「保育室のよく目立つところに大きなチョコレートケーキが置かれている。それを見付けたハイムは、近くにいたルークと一緒に食べようと声をかけるが、ルークはその誘いには乗ってこない。その後、ハイムはケーキを一切れ取って食べてしまう。ルークは、厳しい言い方ではないもののケーキを食べたハイムの行為を咎め立てる。その一方で、同じことをしようとして思いとどまり、手についたクリームをなめたクリスチャンに対しては寛容だ。そして、ルークは保育士が現れると、この出来事を積極的に伝えた。」

この一連の事実をどう捉えるか、ルークの視点から考えようというのである。

観察法では、こうして場面を区切って行われることが多いが、言動の背景を理解するためには、それまでの経過にも注目することが求められる。ルークの場合、主たる 6 人との接触も多く、映像の中に何度も登場している。

授業で取り上げたのは、次の場面である。

- シーン 1 座っていた椅子をハイムに横取りされる。一緒に遊んでいたクリスチャンがかばう。
- シーン 2 キックボードの貸し借りをめぐりハイムと口論になる。
- シーン 3 ジェシカに「親友になってほしい」と頼む。
- シーン 4 半年後の再開直後、ハイムに話しかける。
- シーン 5 積み木遊びで、クリスチャンの指示に従う。
- シーン 6 ジェシカに「家に遊びに来ない？」と誘う。
- シーン 7 ジェシカがジェイダと一緒に歌を歌った際、隣で大きく拍手をする。
- シーン 8 保育士に、いじわるされたらどうするかと問われ「先生に言いつける」と答える。

授業では、それらのシーンのすべてに動画から作成した静止画を用意し、時系列に並べて順に確認していった。以下にスライド資料の 1 例（シーン 1）を示す。



図 7 動画から作成した資料(ルークの登場シーン)

観察法では、事実の記録のみならず、それをどう解釈するかという力が問われる。解釈には発達や心理にかかる知識が必要である。学生には、現在まだその十分な知識はないものの、昨年、保育実習の場で獲得した子どもの見方、捉え方は役に立つものと考えられる。

むしろ難しいのは「事実」と「解釈」を分けることであろう。「事実」とは行動そのものであり、「解釈」は、その意味づけであることを、よく理解する必要がある。

その理解を助けてくれるのが、TV ドキュメンタリーに登場する 2 人の研究者のことばである。授業では、図 8 に示すような研究者の解釈を文字にして示し、思考のモデルとして参考にするよう促した。



図 8 動画から作成した資料（研究者の解釈）

例えば、この資料にある「悪い行いは知性の現れです。いかにルールを曲げられるか考え、ルールとはどんなものかを見極めようとしているのです。また、みんなが怖がることをして、勇気を出しているとも言えます」とは、チョコレートケーキを食べたハイムについての研究者の解釈である。その言葉には、「A は B の表れである」「～をしようとしているのである」「また、～を示しているとも言える」といった論理的な表現が多く含まれている。こうした文型が示されることで学生の思考力は活性化するのである。

この後、授業は、このハイムがチョコレートケーキに手を出す場面の動画を再度見直し、ルークに注目しながら捉え直す過程に進んだ。視聴と記録・解釈の時間を経て、数人が代表で自分の見立てを発表した。彼らの記述を以下に示しておく。ただし、事実の記録（メモ）の部分は除く。

ルークの行為は「正義」― 学生Dの解釈

LUKEは、ビデオに出てきた他の子ども達と比べると、成長が早く正義感が強い子だと感じた。チョコレートケーキ自分も食べたいけど我慢をし、悪いことは悪いとハイムやクリスチャンへ注意できることがすごいと思った。また、「腕を組む」という行為をしてハイムを注意した時は、自分が正しいと決定づけたからだと感じた。

先生が怒っている時も、横から自分は注意したと自己主張もしていて、正義感あふれる子で勇気があったと感じた。（下線筆者）

ルークは「人と関わるしっかり者」― 学生Eの解釈

ルークは、どちらかと言えばひかえめな性格だったように思う。（これまでハイムとのシーンが多かったというのもあるからかもしれないが。）

でも、いろいろな人に積極的に関わっているように感じた。チョコケーキのシーンでは、自分も食べたいけどダメなことだときちんと理解し、ハイムに食べないように最後まで注意していた。ハイムから食べるよう誘惑された時も、それに負けず、自分で言い訳を考えてきっちりことわっていた。その後、先生に状況を説明していて、しっかり者だなと感じた。芯のある子。

（下線筆者）

ルークは「他者依存の自信家」― 学生Fの解釈

ルークは、ハイムほどではないと思うが、悪い行いに対して面白がったりするおちゃめな一面があると思う。そのため、自分からは悪さをせず、友だちが何かをやらかすと、すぐに先生に言いつける。自分では解決する力がないと分かっているかは不明だが、自分より強い、頼もしい人に依存している面もある。自分の言いたいことを先生に言わせたりする、少しかしこい所もあるかも知れない。（中略／ジェシカとの関係）

発言力があるので、裏のボスのようなと思った。また、ハイムみたいになりたかったのか、半年後は、

とてもパワフルに主張し始めたと思う。正義感があるとは言いきれない。物事の善悪の判断はつく。自信家。（下線筆者）

このように、学生の言葉には「思う」「感じる」などの論理性を弱めるものが目立つが、それは書き慣れることで解消する問題でもあり、ここでは言及しない。

注目すべきなのは、同じ子どもを同じ角度から（映像であるから当然のこと）観ていても、このように受講生の解釈が大きく分かれることである。DやEのように、観察の対象児ルークを肯定的に捉える者の方が比較的多かったが、それでも、正義感、頭の良さ、行動力、発言力、問題解決力、忍耐力等々、評価する視点は実に様々であった。また、Fのように、懐疑的、否定的に捉える者も少なくなかった。

観察法は、そもそも観察者の主観に陥りがちであるところに弱さがある。そのため幼児教育の現場では、カンファレンスなどの場を設け、同じ場面を共有して話し合うことで、保育者個々がもつ（一面的な）見方をより豊かにする努力をしている。客観的に見て正しいと思われる唯一の答えに向かうのではなく、むしろ多様な見方を出し合う中で、個々の保育者が自身の保育と向き合い、子ども理解を深めるということにその重点が置かれている。

本授業も、まさにそうした狙いをもつものであった。引き出し役である筆者は、「ルークはこんな子どもだ」という結論部分で議論させるのではなく、上に示した3名の発言（記述）例で言えば、下線を施した部分に注目させ、「腕を組んで注意する（学生D）」「自分の言い訳を考えて断る（E）」「自分の言いたいことを先生に言わせる（F）」等、対象児に表れた小さな事実と、その内面をどう解釈するかの部分にこそ時間をかけた。代表学生の話聞いた他の受講生がその部分についてどう感じたかを聞き出し、また解説に努めた。

5. 事後の検証

本研究の目的は、第2節に記したように、観察法を指導する際のTVドキュメンタリー活用の効果について検証することであった。

ただし、実験群と統制群を分ける実験的な研究方法をとってはいないため、そうでない場合と比較して効果の程度の違いを示すことはできない。同節にも書いたように、検証の主な方途は「実践事例を通

して明らかにする」ことなのであり、これについては、第4節に記した授業3回分の実践における受講生の反応の記録から、TVドキュメンタリーの活用効果についてある程度証明できたものと捉えている。

しかしそれでも、この「児童研究法」の授業を通して、他の研究法に対する観察法の意義の大きさや、実際に観察法を用いる際のポイントについて、受講生がどの程度理解したかを証明するには不十分である。

そこで、第4回以降「面接法」「質問紙法」「実験法」等について指導した、その最終回の授業において、簡単な記述式の調査を実施し、その結果を見ることにした。本授業「児童研究法」におけるA・B2つのクラス（80名、79名）それぞれに、以下の問いを設定した。

クラスA：幼児教育の場で最も大切にされている研究法は何だと考えられるか。またそれはなぜか。

クラスB：「観察法」では、どのように子どもを見ることが大切か。また、園内研究会等の場ではどのようなことに気をつけて協議すべきか。

Aクラスにおける1つ目の問いの結果は、図9のようになった。「観察法（観察法、参与観察、非参与観察の合計）」が全体の66%を占め、その重要性は理解されているようである。なお、「実験法」と回答した15名についても、理由の中に明らかにTVドキュメンタリーの影響（「隠れ家作り」にかかる実験的観察法）を受けていると思われる者が4名いた。

Bクラスの回答については、以下の基準で4段階に分類した。観察時、協議時ともに観察法についての十分な理解が認められる→IV評価、両方に一定の理解が認められる、もしくは片方だけに十分な理解が認められる→III評価、片方だけに一定の理解が認められる→II評価、ほとんど理解できていない、もしくは無回答→I評価。

結果は、図10に示す通りである。79名中、「III・IV評価」を合わせると54名となり、全体の68%を占める。一方、ほとんど理解できていない者（I評価）は5%であった。全体として、観察法にかかる理解を得ることができたと言ってよいだろう。

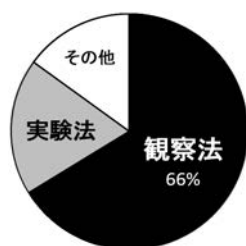


図9 現場で大切な研究法（80名）

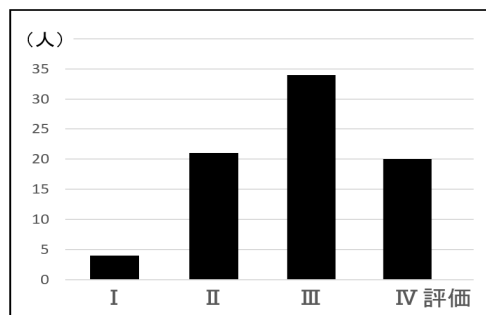


図10 観察法にかかる理解度

最後に、IV評価の回答例を2点挙げておく。

学生G

子どもを見る時は、あちらこちらに行って見るのではなく、観察対象として決めた子どもについて時間等を決めて観察していくことが大切だ。そして、発言だけでなく、視線の動きや友人との関わり方などの非言語コミュニケーションや、行為の背景にも着目する必要がある。研究会では、結果だけを発表するのではなく、その子はどのような意図を持って発言したのかといったように、観察を通して考えた自分の意見を用いて議論すべきであると思う。

学生H

子どもを観察するときは、なるべく普段の姿を知るために、子どもに不信感を与えないことが大切である。そして、客観的な目で観察することである。主観に委ねすぎると、研究の結果が思うように出ないこともあると考える。

研究会では、他の人の意見を批判せず真剣に聞く姿勢が大切である。自分以外の意見を聞き入れることで、新しい結果が見えてくることもあるかもしれない。

6. まとめ

本稿では、第1節において、教育現場等から求められる教師像「子どもが好きであること」は、直ちに幼稚園教諭の資質・能力（専門性）とは言えず、「子どもの表情や行動等に関心があること」と言い換えるべきであると論じた。したがって大学等の養成機関は、これに通じる子ども理解の力を育成するため、「観察法」指導の質を高めることが必要だと述べた。

その観察法の指導には、様々な方法が考えられるが、筆者が実践し、本稿で提案したのは、観察法入門期におけるTVドキュメンタリーの活用であった。

以下、その授業実践の成果をまとめておく。

- TVドキュメンタリーの視聴は受講生を惹きつけ、そこに映し出される幼児一人一人の個性によく着目することができた。
- 注目する幼児を決めることにより、半年という時間経過の中で生まれた変化に具体的に気づくことができた。それにより、一般的な発達段階ではなく、個々の中で起こる成長の値打ちについて考えを深めることができた。
- 子どもの表情や行動を読み取り、その内面や背景を考えることに意欲をもつことができた。また、事実と解釈を明確に分けて捉えられるようになった。
- いわゆるアクティブ・ラーニングも実現され、様々なものの見方を受講生同士が交流する中で、子ども理解の意義、また、その面白さ、難しさなどについて実感することができた。
- また、第5節に記した検証の過程では、次のことが明らかになった。
- 子ども理解にかかる多様な研究法について指導したが、現場の研究にあっては、中でも「観察法」が最も重要な手法であると、よく認識されている。
- 受講生の約7割が、観察法を実施する際のポイントについてよく理解できている。

おわりに

人間の大人も1人で様々な一面を併せもつものだが、子どもの場合は、その長い成長の過程でより多くの人間性が顔を出し、そのたびに揺れ動き、行きつ戻りつしながら時間をかけて淘汰され、人格として形成されていくのである。幼児教育とは、まさにその変化に満ちた時代を支える仕事だと言えよう。

子ども一人一人を支え、その可能性を伸ばすには、対象児をよく観察し理解することが何にもまして大切なのであり、養成機関である大学等においては、今後一層、「観察法」指導にかかる工夫と改善が求められる。本稿で提案した、海外のTVドキュメンタリーの活用が、いくらかでもその契機になれば幸いである。

筆者も、学生が、将来幼児教育を担う保育者として成長する基になるものは何かを見極めながら、明日の授業を創っていきたい。

注

1. 寅丸尚恵、西川正晃、濱田格子ほか（2010）「幼稚園教師に求められる資質能力ー幼稚園本調査の結果分析ー」関西国際大学教育総合研究所編『教育総合研究叢書』第3巻、17-40頁。
2. 藤尾淳子、古川雅文、浅川潔司（2010）「幼稚園教員の資質能力に関する研究ー幼稚園教諭、保護者、園長の力量観の比較からー」兵庫教育大学学校教育研究センター 学校教育学研究編集委員会編『学校教育学研究』第22巻、13-21頁。
3. 保育教諭養成課程研究会（2017）『平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究ー幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考えるー』（URL: http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm 最終アクセス：2017年12月13日）
4. 「」内の部分は『幼稚園教育要領』第1章「総則」第1「幼稚園教育の基本」に記されており、現行版（平成20年告示）、次期版（平成29年告示）ともに同じ文言となっている。
5. NHK「Eテレ」のドキュメンタリー番組『地球ドラマチック』において放送された「4歳児のヒミツー驚きがいっぱいー（原題：The Secret Life of 4 Years Olds）」（2015年8月29日放送）を教材として使用した。
6. ポール・ハワードジョーンズ（教育神経科学者）、サム・ウォス（発達心理学者）
7. 以下、第4・5節にて引用する学生の記述等は全て研究倫理に則って承諾を得た上で用いている。

参考文献

- 日本保育学会編（2016）『保育学講座1 保育学とはー問いと成り立ちー』東京大学出版会。
- 細井房明、野口伐名、大桃伸一編（2009）『保育の理論と実践』学術図書出版社。
- 上野ひろ美（1993）『子ども理解』に関する教授学的考察 奈良教育大学編『奈良教育大学紀要 人文・社会科学』第42巻第1号、81-96頁。
- 椛島香代（2008）「保育における幼児理解のあり方ー保育学科学生の幼児理解の実態分析を通してー」文京学院大学総合研究所編『文京学院大学人間学部研究紀要』第10巻第1号、69-82頁。

Significance and Method of Teaching "the Observation Method" in the Kindergarten Teacher Training Course: Experimenting with the Utilization of TV Documentaries

Faculty of Child Sciences, Department of Child Sciences
Minoru OSUGI

Abstract

Not only is the "observation method" the most widely used method for understanding children, but it is also the most important. For this reason, in kindergarten teacher training courses at higher education institutions, the focus of instruction is also guided by this method. However, there are 3 major obstacles in teaching observation methodology in universities. First, it is difficult to visit kindergartens and do observation if the number of university students is large. Secondly, if the observer cannot have close contact with the children, it is difficult to capture their voices and expressions, and therefore one cannot come face-to-face with "the facts of learning ". Thirdly, it is important to continue to observe the same child over an extended period of time as well as observe that child's interpersonal relationships. This is impossible to do by a single observation. On the other hand, using TV documentaries about infant learning that has had pertinent and interesting facts extracted is an attractive alternative. If the intent of production matches the purpose of university education, it should be actively utilized. This research paper reveals that by effectively utilizing video materials of TV documentaries in actual classroom practice, that students can acquire the basics of observation methodology.

Keywords: child understanding, teacher training, observation method, the facts of learning, TV documentaries